

再び舟形土器について

鷹野 光行

1. はじめに

縄紋時代晩期後半の北海道には「舟形土器」と呼ばれる特色ある形態の土器が出土する。舟形土器については旧稿がある（鷹野 1983）が、旧稿当時には17遺跡の資料により分析を行ったのがその後35カ所の資料を収集するに至り、個体数も増え、なお遺漏はあるものとは思いますが新たな資料を加えて旧稿で示した分析を改めて検証してみたい。なお、破片も含めて今回収集した舟形土器の出土遺跡を第1表に示した。

第1表 舟形土器出土遺跡

遺跡名	所在地	文献
相生1遺跡	音更町	佐藤忠雄 1986
旭町1遺跡	三石町	北海道埋蔵文化財センター 1983 b
厚真10遺跡	厚真町	苫小牧市教育委員会他 1986
内園2遺跡	深川市	北海道埋蔵文化財センター 1988
内園4遺跡	深川市	深川市教育委員会 1992
内園6遺跡	深川市	深川市教育委員会 1996
大狩部遺跡	新冠町	藤本英夫 1961・鈴木/林編 1981・乾芳宏 1988
大曲遺跡	網走市	山内清男他 1964・伊東信雄 1979
オサツ16遺跡	千歳市	北海道文化財保護協会 1997
オンコロマナイ貝塚	稚内市	大場利夫・大井晴男 1973
オンネチカップ遺跡	白糠町	沢四郎・富水慶一 1966
キウス5遺跡	千歳市	北海道埋蔵文化財センター 1997
駒里遺跡	千歳市	石川徹 1979
沢田の沢遺跡	東神楽町	斉藤傑 1981
静川4遺跡	苫小牧市	小林/小川 1989
志美第3遺跡	石狩町	石橋孝夫他 1979・鈴木/林編 1981・小林/小川 1989
砂浜遺跡	北村	北村教育委員会 1985
高砂遺跡	江別市	江別市教育委員会 1988
滝里32遺跡	芦別市	北海道埋蔵文化財センター 1992・同1993
T210遺跡	札幌市	札幌市教育委員会 1976

T151遺跡	札幌市	札幌市教育委員会 1989
トニカチャシコツ遺跡	門別町	門別町教育委員会 1985
中ノ島遺跡	北見市	久保勝範他 1978
永山4遺跡	旭川市	旭川市教育委員会 1985・同1997
幣舞遺跡	釧路市	釧路市埋蔵文化財調査センター 1996
ヌタブ遺跡	平取町	平取町教育委員会 1998
鳩山第3遺跡	栗山町	野村崇 1965・野村崇他 1977
ピラガ丘遺跡	斜里町	鈴木/林編 1981
細岡遺跡	釧路村	鷹野光行 1983
幌倉沼遺跡	東川町	佐藤忠雄他 1966
ママチ遺跡	千歳市	石川徹他 1971・鈴木/林編 1981・北海道埋蔵文化財センター 1983a・同 1987
緑ヶ岡遺跡	釧路市	山内清男他 1964・芹沢長介 1975・坪井清足 1976・小林達雄編 1977・佐原真 1979・坪井清足編 1979・鈴木/林編 1981・鷹野光行 1983・小林/小川 1989
室蘭市内（北海道大学農学部附属博物館所蔵品）	室蘭市内	小林達雄編 1977・佐原真 1979・鈴木/林編 1981
メム川遺跡	妹背牛町	妹背牛町教育委員会 1972
鷲府7遺跡	足寄町	足寄町教育委員会 1986

2. 器形の定義と分類

旧稿において舟形土器を形態から定義していくつかの特徴を列挙した。あらためて定義のみを再録する。

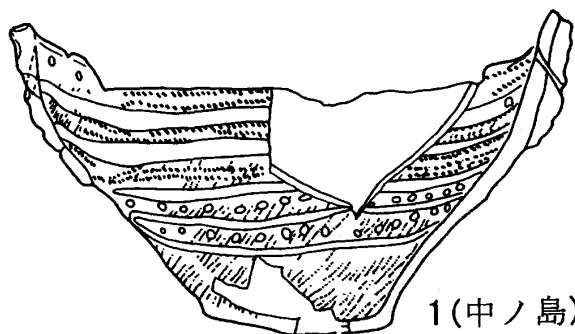
「I. 上面観、すなわち真上から見た時に口縁部の形が楕円形又は太い紡錘形をしていること。

II. 側面観、すなわち横から見た時に、口縁部の両端がはね上がっており、舟になぞらえると舳艫が明瞭に認められること。このはね上がりは突起によることもある。」（鷹野 1983 pp.49-50）

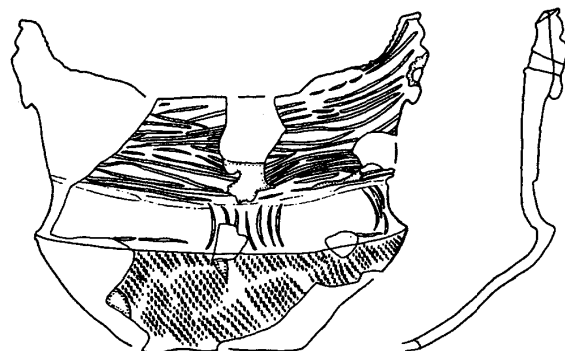
この定義により器形をA類～I類に分類したが、本稿においては細部の修正を行い、G類を一つにまとめた上でI類とした特殊形を抹消してここに含めることとした。分類基準を第2表にまとめ主な形態を第1図に示した。

第2表

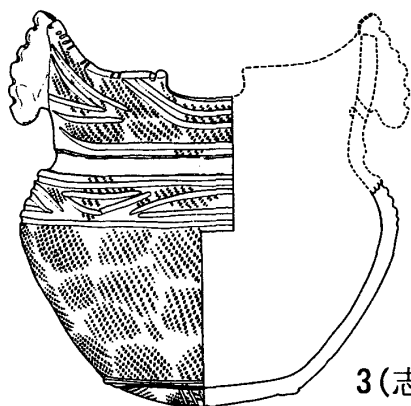
分類	特 徴	図
A類	胴部半ばにくびれや稜をもたず、小さめの底部から口縁部に向かって大きく開いていく浅鉢に似た側面観のもの。	第1図1
B類	胴部半ばに無紋帯があり、無紋帯の反りが大きくて下端に鋭い稜がある。胴部の最大幅はこの稜の部分にある。口縁は直立またはやや外反する。底部は大きめである。	2



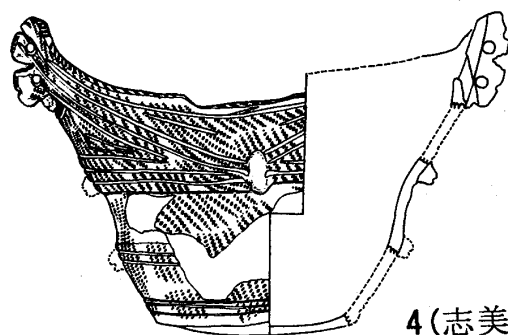
1(中ノ島)



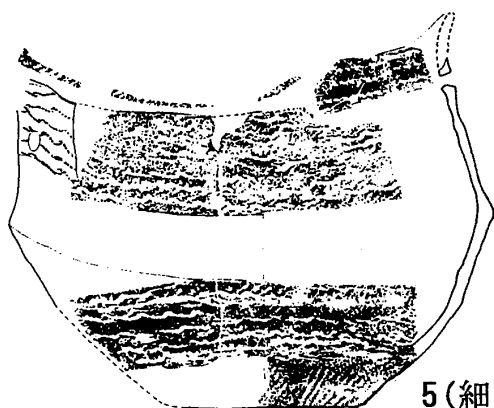
2(ママチ)



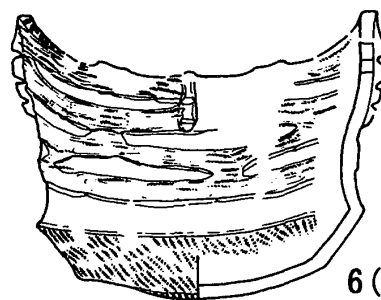
3(志美 3)



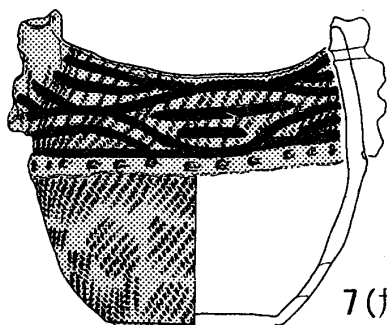
4(志美 3)



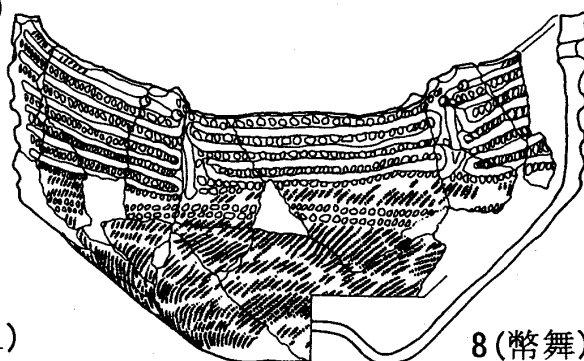
5(細岡)



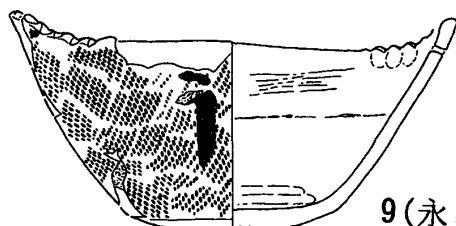
6(厚真 10)



7(旭町 1)



8(幣舞)



9(永山 4)

第1図 器形の種類 (縮尺は約1/4)

C類	胴部半ばに無紋帯があるが、ここで著しくくびれ、胴部の最大径は無紋帯よりずっと下にある。口縁部は直立またはやや外反する。胴部及び底部の横断面は円形である。	3
D類	これも胴部半ばに無紋帯があるが、B類とC類よりは下方に位置する。口縁部が外反して逆台形に近い形になるのが特色で、底部は大きい。無紋帯の部分に縄紋が施されるものがある。	4
E類	B類とほぼ同じ位置に無紋帯があるが、B類と比べて反りが小さく、稜もあるがその角度は大きい。口縁部は直立気味である。	5
F類	無紋帯が胴部の下部にあり、その下端は張り出して稜を作る。B類と似ているが無紋帯はB類よりずっと下で無紋帯より下側には地紋以外の紋様は施されない。	6
G類	無紋帯がなく、胴部のほぼ中央に稜がある形。稜以下は縄紋のみが施されるか、何もない。	7・8
H類	側面観は鉢形とあまり変るところはなく、胴部に無紋帯も稜もない。	9

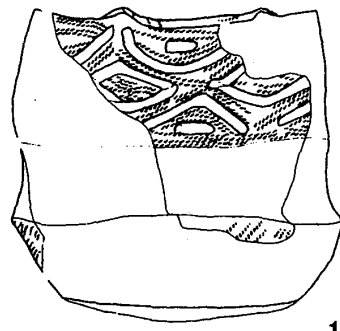
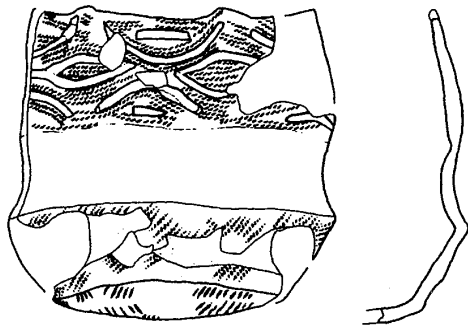
3. 紋様の特色と分類

紋様はタンネトウL式や幣舞式など晩期後半の土器の紋様に共通する繁褥な紋様が多いが、舟形土器の後半期に位置づけられるものは地紋の縄紋の上に沈線のみで三角形を基調とした線を引き、あるいはそれが流れた弧線紋となる紋様が目立つ。旧稿ではa類～j類に分けたがこれにk類とl類を追加する(第3表・第2図～第3図)。

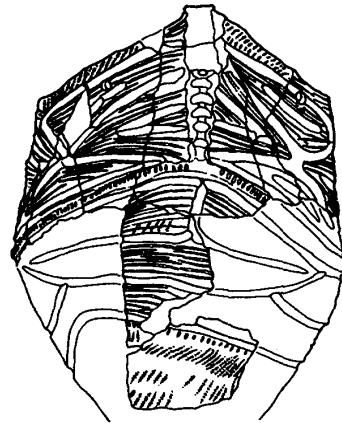
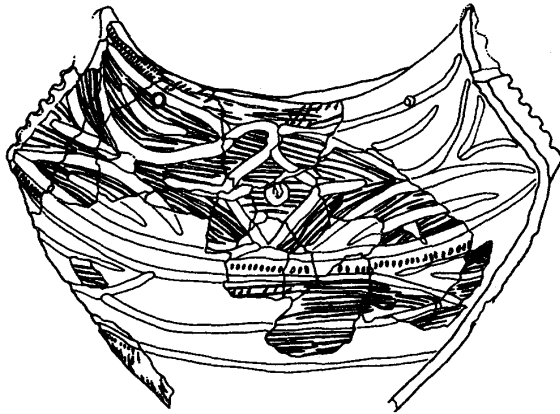
第3表

分類	特 徴	図
a類	太い沈線と縄を押捺した縄線紋の組み合わせによる紋様。	第2図1
b類	太い沈線と極細沈線を使った紋様。極めて繁褥である。	2
c類	太い沈線とこれに沿って施される列点紋(刺突紋)による紋様。	3
d類	地紋としてある縄紋と太い沈線による紋様で沈線は三角形の構成を基調とする。	4
e類	地紋の縄紋と太い沈線による紋様。沈線は流れて弧線紋となる。	第3図5
f類	縄線紋(縄の側面を押捺する)主体の紋様。	6
g類	綾絡紋。	7
h類	沈線で長楕円形を描く。地紋に縄紋がないこともある。	8
i類	沈線と器面全体を覆う刺突紋。	なし
j類	縄紋のみのもの。	9
k類	上半部に横走する平行沈線のある紋様で、dやeと同じ系譜にある。	10
l類	口縁部などに横走する平行沈線が数本施されるもの。縄紋などはない。	11・12

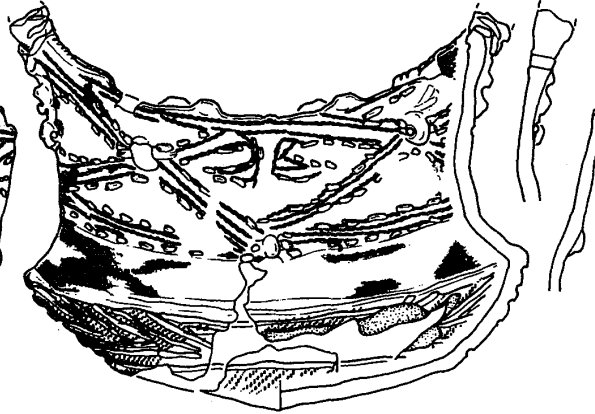
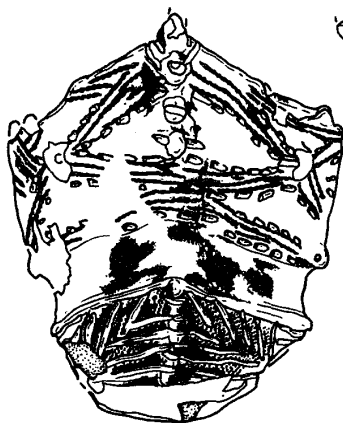
旧稿では、a～d類の紋様をI期、e～g類をII期、h～j類をIII期と分類した。今回付け加えたk類とl類もIII期に含めてよいだろう。k類はe類の弧線紋がさらに硬直化して直線化し、横走するのみとなるととらえてよかろう。l類と共にIII期に含めるのは、第4表によっても認められる。



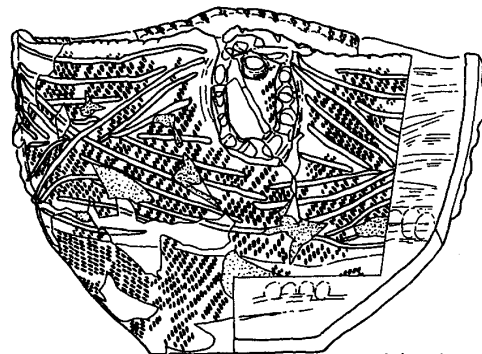
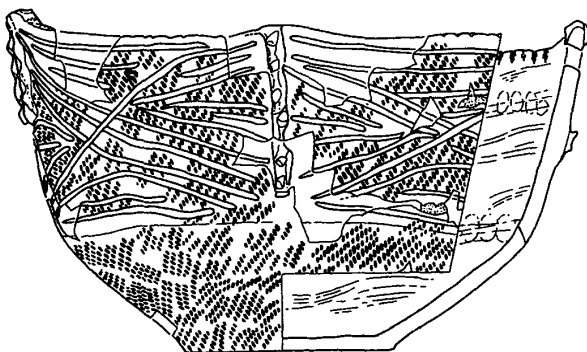
1(ママチ)



2(幣舞)

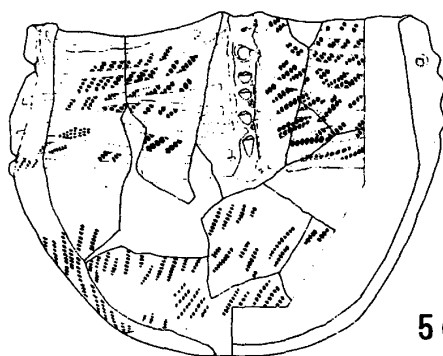
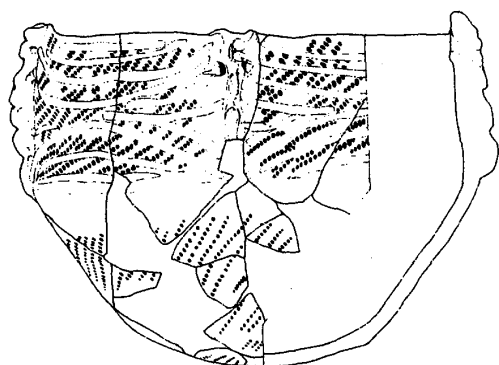


3(ママチ)

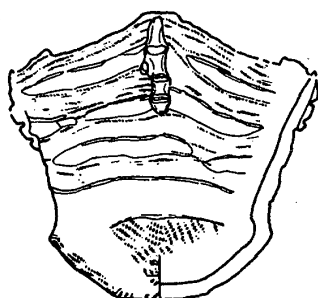
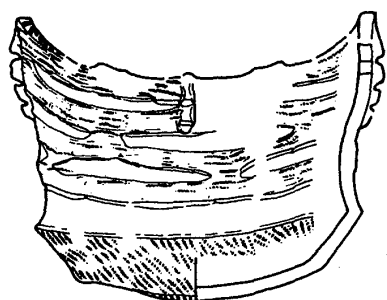


4(永山4)

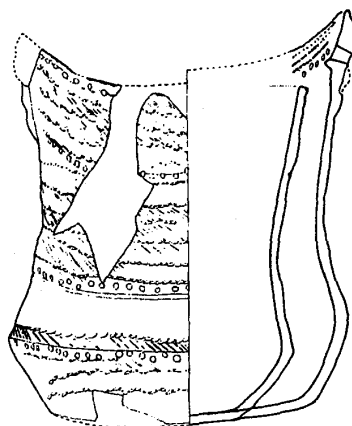
第2図 紋様の分類(1) (縮尺は約1/4)



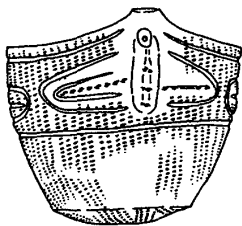
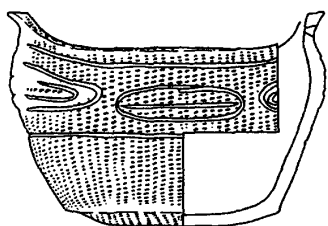
5(沢田の沢)



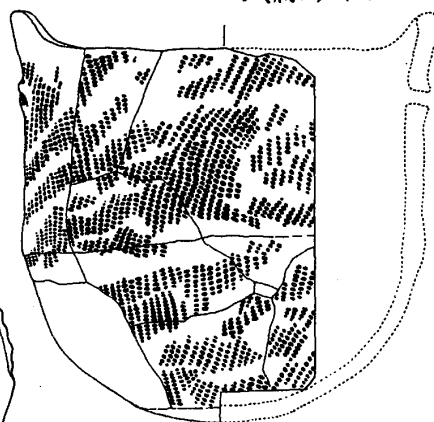
6(厚真 10)



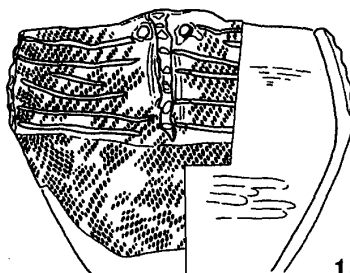
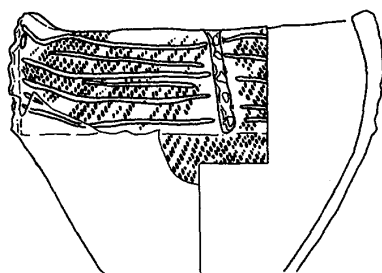
7(緑ヶ岡)



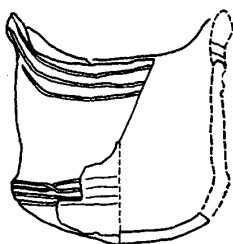
8(大狩部)



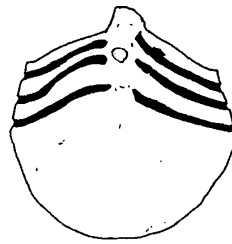
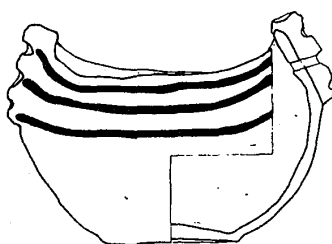
9(沢田の沢)



10(永山 4)



11(内園 6)



12(旭町 1)

第3図 紋様の分類(2) (縮尺は約1/4)

第4表

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l
A	○			○								
B	○	○	○	○	○							
C		○		○	○		○					
D		○	○	○		○						
E						○	○					
F						○					○	
G		○	○	○	○			○		○	○	○
H					○				○	○	○	

器形の分類と紋様の分類の関係をまとめた第4表からは、G類の器形がほぼどの紋様にも対応していることが明らかになるし、表中左上のグループ（A～D・G、a～dの組み合わせ）、ほぼ真ん中のグループ（B～F、e～gの組み合わせ）、右下のグループ（F～H、h～lの組み合わせ）の3つにまとめることも見て取れる。この3つのグループは舟形土器のI期からIII期の区分に対応するものである。

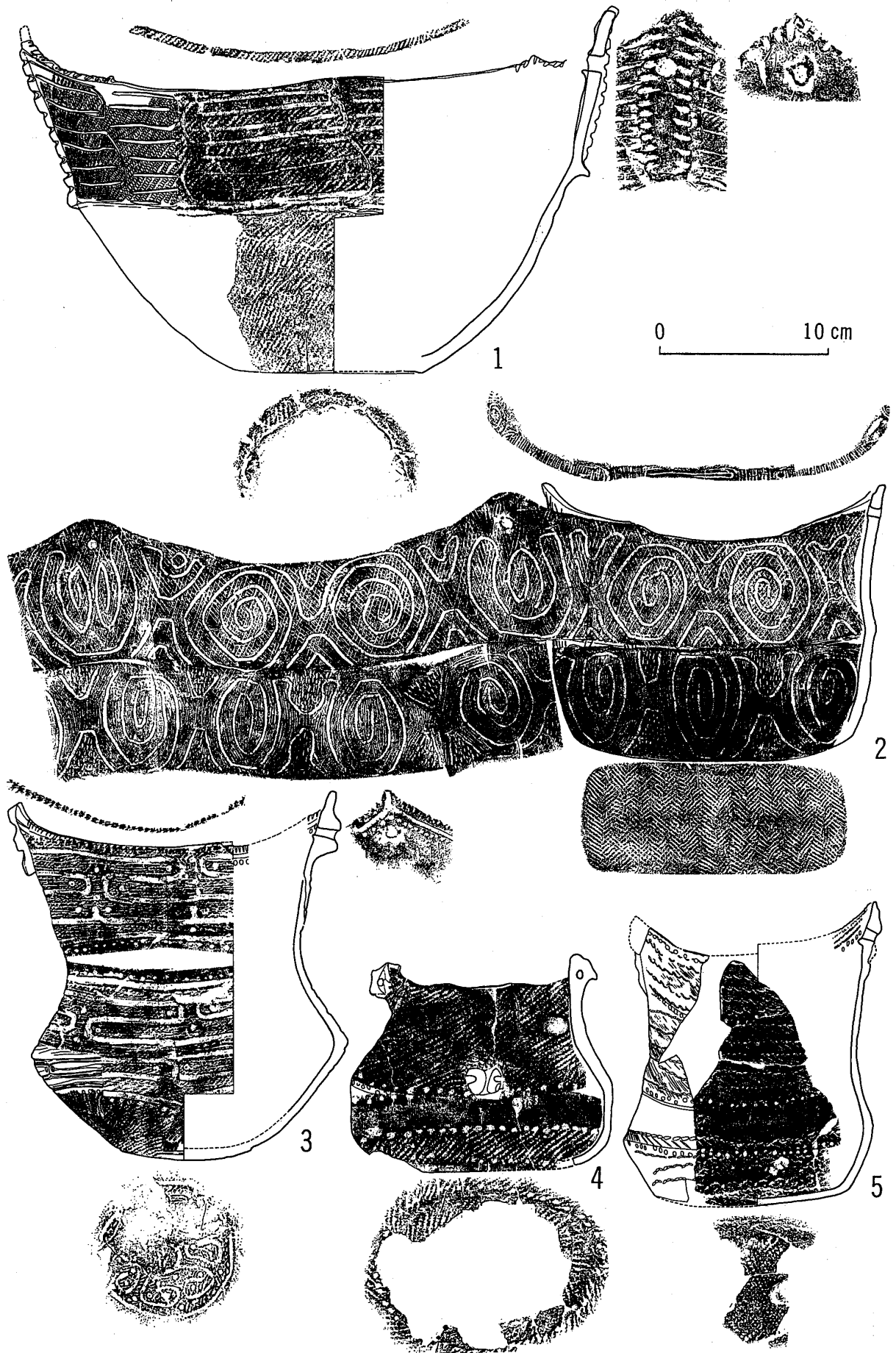
なお第4図は、釧路市立博物館所蔵の緑ヶ岡遺跡出土の舟形土器である。筆者はこれらを1982年の冬、実測させていただきその結果を旧稿において実測図でしめした。その折、土器の表面の拓本も取らせていただいていたので、今回はそれを利用し、拓影を貼った図とした。当時の故沢四郎館長をはじめ、西幸隆氏、松田猛氏に改めて感謝する。

4. 舟形土器の用途・性格

沢四郎は『日本原始美術1』（山内清男編 1964）に掲載された大曲遺跡出土の舟形土器の解説の中で「往々にして赤色塗彩されたものがあり、又墳墓における副葬品として出土するが多い」と早くもこの土器の性格を見通した記述をしていた。特異な器形なので注目を引きやすいものではあっただろうが、出土の報告がまだそれほど多くなかった時点でなされた的確な指摘であった。沢の指摘を現時点で検証してみよう。

① 赤色塗彩された土器

破片出土の遺跡を除き、痕跡も含めて、旭町1遺跡（2個体）・オンネチカップ遺跡、志美第3遺跡・中ノ島遺跡（5個体）・永山遺跡（十文字に塗彩）・ママチ遺跡（3個体）・緑ヶ岡遺跡（3個体）、の土器に見られる。また幌倉沼遺跡の舟形土器には白彩されたものがあった。完型品もしくは図上復元でほぼ器形の明らかになるものを含め、本稿で分析に用いた71個体の内で、16個が赤く塗られていた。



第4図 緑ヶ岡遺跡の舟形土器

② 墓からの出土

出土遺跡35ヶ所のうち、墓地遺跡と見なせる遺跡が次の15ヶ所ある。

相生1遺跡・旭町1遺跡・内園4遺跡・大狩部遺跡・オサツ16遺跡・沢田の沢遺跡・札幌市T210遺跡・トニカチャシコツ遺跡・永山4遺跡・幣舞遺跡・鳩山遺跡第3地点・幌倉沼遺跡・ママチ遺跡・緑ヶ岡遺跡・メム川遺跡

これらの遺跡での出土状況で、墓壙と考えられるピットの上面、あるいは覆土中より出土した個体が71個中29個あった。沢のいうように副葬品であるならば壙底からの出土があつてよいはずだが報告書中に特にそうした記述は見られない。この出土状況からは、副葬品としてだけでなく、墓に供える土器であつたのだろうことが想定される。

また、住居跡からは旭町1遺跡・志美第3遺跡の2ヶ所で出土している。どちらも床面出土である。しかし旭町1遺跡は「住居以外の別の意味を持つ竪穴の可能性も想定できる」（北海道埋蔵文化財センター 1983）遺構であり、志美3遺跡も「儀式的様相の行動」に利用された「非常に特殊な性格を持った遺構」からの出土であつた（石橋他 1979）。中ノ島遺跡では7個体の完型に近い舟形土器を含む土器群が何らかの遺構に伴って出土し、遺構の性格は不明であるとしながら何らかの祭祀に関係する遺構である可能性が示唆されている。滝里32遺跡では舟形土器と見られる破片が石組炉で出土した。

器面に炭化物が付着している個体もいくつか報告されており、特に緑ヶ岡遺跡の第4図-2の土器には、「長時間屋内で燻煙にさらされたせい、光沢を有する薄く堅い煤が付着している」（沢 1979）と観察され、火にかけた結果ではなく、屋内においたり吊したりすることが想定される煤の付着状況である。

以上のように、沢の副葬品、墓に関連する遺物としての見通しはほぼうなずけたのだが、それに加えて屋内での使用も考慮されてよいのだろう。結局旧稿における「墓の副葬品であると共に特殊な儀礼に用いられた」とする見解（鷹野 1983 p.62）を変更する新たな知見は得られなかった。しかしその儀礼の内容は見えない。

5. おわりに

舟形土器は、「北海道晩期（とくに後半期）の非大洞系土器の指標の一つ」（沢四郎 1981）とされる、北海道独特の土器である。北海道内でも亀ヶ岡式の文化圏である道南の渡島半島部からは今のところ出土していない。亀ヶ岡式では、晩期を通じて土器の器種は定型化し、土器以外では土偶が文化の様相を考える上で一定の役割を果たしている。舟形土器は亀ヶ岡式の大洞A式～A'式の時期にあり、この時期北海道では土偶はあまり発達しないようだ。そしてママチ遺跡に典型的に見られるような各種の異形土器とともに舟形土器が存在する。沢四郎の「ヌサマイ式は多様な器形で構成されている。深鉢を主体に、浅鉢・壺形・舟形・魚籠形・片口・皿状注口・双口土器などがある」（沢四郎 1987）との指摘

を受けて金森典夫はI期の舟形土器の属する幣舞式について、「形態的にも文様的にも一見して斉一性に乏しく」「一定の規範性に富む大洞式土器群（中略）と際だった違いを見せている」と指摘する（金森 1989）。今回、舟形土器のみを材料としてみてきたが、こうした多様性を生み出した晩期後半期の北海道社会の様相を明らかにしながら考察していかなければならないものだろう。

(2003年4月7日)

< 参照文献 >

- 旭川市教育委員会 1985 『永山4遺跡』 旭川市埋蔵文化財発掘調査報告書第8輯
旭川市教育委員会 1997 『永山4遺跡II』 旭川市埋蔵文化財発掘調査報告書第22輯
足寄町教育委員会 1986 『鷲府7遺跡』
石川徹他 1971 『ママチ遺跡』
石川徹 1979 『続千歳遺跡』
石橋孝夫他 1979 『SHIBISHIUSU II』 石狩町教育委員会
伊東信雄 1979 「網走市大曲出土の舟形土器の文様と編年的位置」 北海道考古学第15輯
乾芳宏 1988 「大狩部式土器の一考察」 北海道考古学第24輯
江別市教育委員会 1988 『高砂遺跡(4)』 江別市文化財調査報告書26
大場利夫・大井晴男 1973 『オンコロマナイ貝塚』 東京大学出版会
金森典夫 1989 「幣舞式土器様式」 小林・小川 1989 『縄文土器大観4』 所収
北村教育委員会 1985 『北村砂浜遺跡』
釧路市埋蔵文化財調査センター 1996 『釧路市幣舞遺跡調査報告書III』
久保勝範他 1978 『北見市中ノ島遺跡発掘調査報告書』 北見市
小林達雄編 1977 『日本原始美術大系1』 小学館
小林達雄・小川忠博 1989 『縄文土器大観4』 小学館
斉藤傑 1981 『東神楽町沢田の沢遺跡発掘報告』 東神楽町教育委員会
札幌市教育委員会 1976 『T210遺跡』 札幌市文化財調査報告書XIII
札幌市教育委員会 1989 『T151遺跡南側地点』 札幌市文化財調査報告書XXVIII
佐藤忠雄 1966 『幌倉沼の墳墓』 東川町教育委員会
佐藤忠雄 1986 『相生』 音更町教育委員会
佐原真 1979 『日本の原始美術II』 講談社
沢四郎・富永慶一 1966 「オンネチカップ（西庶路）遺跡調査報告」 北海道白糠町の先史文化第1輯
沢四郎 1979 「53 縄文 舟形土器 幣舞式」 坪井編 1979 所収
沢四郎 1981 「主要遺跡 図版解説35」 鈴木公雄・林謙作編 1981 所収
沢四郎 1987 『釧路の先史』 釧路叢書第24巻

- 斜里町教育委員会 1972 『ピラガ丘遺跡』
- 鈴木公雄・林謙作編 1981 『縄文土器大成4 晩期』講談社
- 芹沢長介 1975 『陶磁大系1 縄文』平凡社
- 鷹野光行 1981 「晩期の土器 北海道東部の土器」縄文文化の研究4 雄山閣出版
- 鷹野光行 1983 「舟形土器について」お茶の水女子大学人文科学紀要36
- 坪井清足 1976 『日本陶磁全集1 縄文』中央公論社
- 坪井清足編 1979 『世界陶磁全集1 日本原始』小学館
- 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1986 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群I』
- 野村崇 1965 「北海道栗山町鳩山の墳墓遺跡」石器時代7
- 野村崇他 1977 『石狩川中流域の先史遺跡』空知文化財シリーズ第6集 空知地方史研究協議会
- 平取町教育委員会 1998 『ヌタブ遺跡・川向1遺跡』平取町文化財調査報告書IX
- 深川市教育委員会 1992 『内園4遺跡』
- 深川市教育委員会 1996 『内園6遺跡』
- 藤本英夫 1961 「北海道日高國新冠村大狩部の墳墓遺跡」古代学9-3
- 北海道埋蔵文化財センター 1983 a 『ママチ遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第9集
- 北海道埋蔵文化財センター 1983 b 『旭町1遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第10集
- 北海道埋蔵文化財センター 1987 『ママチ遺跡III』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第36集
- 北海道埋蔵文化財センター 1988 『深川市内園2遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第51集
- 北海道埋蔵文化財センター 1992 『滝里遺跡群II』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第74集
- 北海道埋蔵文化財センター 1993 『滝里遺跡群III』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第80集
- 北海道埋蔵文化財センター 1997 『千歳市キウス5遺跡(3)』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第115集
- 北海道文化財保護協会 1997 『千歳市オサツ16遺跡(2)』
- 妹背牛町教育委員会 1972 『妹背牛町メム川遺跡』
- 門別町教育委員会 1985 『トニカチャシコツ』
- 山内清男他 1964 『日本原始美術1』講談社